

一

次の各文の——線部のカタカナの語を漢字に直しなさい。

- ① お手紙ハイケンしました。
- ② その問題でトウギを重ねた。
- ③ コンナンを乗り越えた。
- ④ 川のチスイ工事が始まった。
- ⑤ 発言のイトがわからない。
- ⑥ 妹はゴウジョウなのでこまる。
- ⑦ ヒンプの差がはげしくなる。
- ⑧ 自然をカンサツする。
- ⑨ 事件の真相をキュウメイする。
- ⑩ ザンコクな話を聞いた。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

家に黒いお化けのようなアップライト・ピアノが届いた！ 私はそれが「来る」ことを知っていたが、なぜ来るかは知らなかったし、うかつにも自分に関係があるとは思っていなかったのだ。

新品のそいつは、つやつやとよく光り、さわると指のあとが残る。それは、なんともうれしい、ゾクゾクさせられる瞬間だった。私はクッキーのバターがしみこんだ手で、ピアノにべたべたと模様をつけて遊び、母のお目玉をくらった。

「ピアノが怒るわよ！」

当時、小学校にはいらたての私には、その言葉がやけにずしんときたものだ。私はピアノを恐れていた。なにしろ大きすぎる。背もたれのない丸いすに腰かけ、ピアノに向かうと自分が世界中で一番チビのような気持ちにさせられるのだ。

重たいふたをのしつとあげる。巨大な歯のような真つ白い鍵盤がずらずらとどこまでも続いていく。ピアノはその大きな歯をむいてににに、キキキキと笑う。私がキーをたたくと、たしかにそんな音がした。

ピアノの黒は悪い黒だ。やみ夜の色、ごきぶりの色。

頭をキンとさせるようなおいがする。

私はすぐにピアノがきらいだとわかった。そして毎日それを弾かされることが決まるとピアノは、かつてない手ごわい敵になった。

私は母にうったえた。

「なんで、あたしだけなの？ 進はやらなくていいの？」

「男の子はピアノを習わないものなの」

私の通っていたピアノ教室には、ちゃんと男の子がいた。だが、母にそのことを説明してもむだだった。一つ違いの弟の進は、自分の幸運に気づきもせず、それが、いよいよ私をむつとさせた。

私は自分のイライラを、まゆの中のかいこのようにひっそりと育てていた。五月の誕生日に進が新品の自転車を買ってもらった時、イライラは最初の爆発をおこした。私の四月のバースデー・プレゼントは、あのピアノだ。そして、私の自転車は同じ団地のB棟に住

む従姉のお下がりだった。

A。当時はそんな立派な言葉を知らなかったから、ずるいずるいとわんわんわめいた。両親は怒った。そして、私にピアノの値うちを理解させようとさんざん骨を折ったが、それはむだな努力だった。ピアノの値段がいくらだろうと、弾けるようになるのがどんなにすばらしいことだろうと、私はかまひやしない。

私はピアノは欲しくなかった。進は一番欲しがっていた自転車を買ってもらった。これはサベツだ。私は、ずっとずっと小さい時から、弟が自分よりいい思いをしないように、気をつけて見はっていたのだ。

「なんて、わがままなんでしょう」

母はなげいた。

「今の自転車がこわれたら、新しいのを買ってやるから」

母より甘い父がとりなした。

「ふうん。じゃ、すぐにこわすわ」

私は言った。本気だった。

両親はとても恐ろしい顔をした。あの顔を私は今でもよく覚えている。彼らには、私のイライラはさっぱり理解できなかったのだ。

ピアノの練習は、いつも母の「見はり」つきだった。団地の狭いLDKのリビングの端にピアノ、キッチンの端に流し台がある。母は夕食の支度をしながら、私のピアノを聴いた。タンタタンタンと野菜を刻む音は、私の音階練習よりは、はるかにリズムカルで聞いている気持ちのいいものだった。

「ほら、違う。音がとんだわよ。ラの音を抜かした」

「わかってる！」

「だって、さっきもラを抜かしたのよ。ちゃんと譜面を見てる？」

「見てる。あたしは指が五本しかないのに、どうしてドレミファソラシドは八個あるのよ。このピアノって大きすぎる！」

「ピアノはみんな一緒よ。ちゃんと練習すれば、誰だって出来るの」

ドレミ…ファ…ソ…ラシ……ド。

「そうよ。それでいいの」

私たちは背中を向けあって、しゃべっていた。母は流しやガス台に目を配り、私はみがきたての歯のような鍵盤をにらんでいる。そして、私の後ろのソファーには、進がしょっちゅうゴロゴロとこがっていたのだ。

「ああ、うるさい」

進は耳からイヤホーンをはずして言った。この時間帯には、進の好きなアニメーションの再放送がある。

「あんた、ジャマよ！ どっか、行っちゃってよ」

私は声をとがらせた。

「なんで、いつも四時半にやるんだよ。今じゃなくなつて、やれるじゃないか」

弟はふくれた。私がわざとこの時間をねらって練習するのを彼は知っているのだ。

「ねえ、テレビ、もう一つ買おうよ。キミオくんチなんか、ちゃんと二個あるんだよ。ゲーム用にさ」

「残念でした。ピアノ買ったから、うちは赤字なの。お金がないの。そうでしょう？ お母さん」

母はため息をついた。そして、進にテレビを消して外で遊ぶように命令した。

「けえええっ」

進は思いきりわめいたが、言いつけには従った。そして、腹立ちまぎれに、私に向かって悪態をついた。

「アマダレ、アマダレ。下手くそのこと、アマダレって言うんだよ。あまだれえ」

私は黙ってドレミファソラシドを左手で弾いた。

「アマダレじゃ雨がかわいそうだな。ゴマダレもんな。ゴマダレ。佳奈のブタ肉」

私は目をつりあげて立ち上がったが、進の逃げ足は速かった。

玄関でしゃくにさわる弟はどなった。

「母さん、シャブシャブやろう！ ゴマダレが食いたい」

五月も半ばを過ぎた。うつすらと汗ばむような春の日差しの中、若葉のにおいがむんむんたちこめている。このきついにおいをかぐと、なんだか空気に緑の色がついているような気がして、胸がわくわくしてしまう。髪や指先や舌がいつのまにか緑色に変わっているんじゃないかと思って、鏡をのぞきこんだりする。

伊山佳奈。こんな名前じゃ五月はつまらない。もつと木の精のような不思議な感じの名前が欲しくなって、私は進に言った。

「今度から私のこと、カーナって呼ぶのよ」

弟は歯ざしりして、いやがったが、逆らう度胸はないので、カーナ、カーナとセミの鳴き声のようにさえずった。

うん。まあ、それでもいいわ。

B だから。道を歩いても、急に駆け出したり、スキップしてしまったりする B だら

ら。

(佐藤多佳子『サマータイム』による)

問一 線① “来る”とありますが、この“来る”につけられた記号“ ”には筆者のどのような意味が込められていますか。最も

ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母が私のためにわざわざ「新品」のアップライトピアノを注文してくれたことを強調するため。

イ アップライト・ピアノは、黒いお化けのようだったので、「得体の知れない存在だ」ということを表すため。

ウ 新品のアップライト・ピアノは、つやつやとよく光るが、さわると指のあとが残るので、毎回「ゾクゾクさせられる」ことを強調するため。

エ アップライト・ピアノが来るのを、家族全員で今か今かと待ちわびていた矢先に届いたというのを強調するため。

問一 — 線②「お目玉をくらった」・④「骨を折った」の文章中の意味として最もふさわしいものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

②「お目玉をくらった」

ア にらみつけられた

イ 話しかけられた

ウ ひどく怒られた

エ 背を向けられた

オ 力で抑えられた

④「骨を折った」

ア 立腹した

イ 苦労した

ウ 調査した

エ 負傷した

オ 相談した

問三 — 線③「いよいよ私をむっとさせた」とありますが、なぜ「私」はむっとしたのですか。文章中の言葉を使って答えなさい。

問四 空欄 A には、「私」の気持ちを表す言葉が入ります。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 感謝

イ 切ない

ウ 誇らしい

エ さがかりだ

オ 不公平だ

問五 空欄 B にあてはまる言葉を文章中から漢字二字で答えなさい。

問六 本文の特徴として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 読み手が、場面、状況、ストーリー等を理解して読み進められるように、本文の各箇所情景描写を加えている。

イ 日常で起こり得るような状況設定をすることで、各登場人物への感情移入をしやすいように工夫をしている。

ウ 両親は、子どもたちに物の価値や大切さを伝えるなど、子どもへの指導をないがしろにしない人間として描かれている。

エ 「私」はわがまま、「弟」は寡黙かもくという対立した性格を一貫して描くことによつて、二人を作品の中心に据えている。

オ 「父親」は家族の言動を客観的に見つめ、「母親」が困った時にだけ言葉を発するように、やや控えめな存在として描かれている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、字数制限のある問題では、句読点も字数に含むものとします。

熱帯モンスーンアジアには「米と魚」のセットがあると書きました。同じセットは温帯モンスーンアジアにもみられます。その究極の姿が寿司です。寿司というと、今の日本では「握り」や「ちらし」を思い浮かべることが多いと思いますが、これらは、寿司は寿司でもうんと新しいものです。寿司の原型は、「なれずし」と呼ばれる食品ではないかといわれています。日本に残る数少ないなれずしが、琵琶湖岸に残る「ふなずし」、あるいは「鮒ふなのなれずし」だろうと思います。これは、フナをご飯とともに乳酸発酵させて保存する発酵食品で、その歴史は相当に古いようです。

まず、春先に獲ったフナはワタを取ってよく洗い、塩をして三月ほどおきます。これは先に紹介した魚ぎょ醬に通じる工程です。六月頃、いよいよなれずしの作業に入ります。専用の木樽の底に軽く塩をし、少ししました飯を薄く入れます。その上に塩をしたフナをぎっしり並べて上から塩をします。その上にまた飯を載せ、さらにフナを載せてゆきます。こういう作業を繰り返し、最後に木製のふたをおき、その上から石の重りを載せるのです。

しばらくすると水がでてくるので、ていねいにとってやります。半年もすると飯はどろどろに溶け、またフナの身も乳酸菌によって発酵してきます。二年はもつ、といいます。

ふなずしはおいがきつく、食べられないとなかなか X が出来ませんが、いったんこの味にはまると止められなくなります。乳酸菌が出す酸の影響で骨まで軟らかくなり、残すところはありません。人によっては魚のチーズなどともいわれるようです。珍味、です。私もこれが大好きですが、なかなか X に入りません。最近では京都の市場などでも見かけることがあります、高くてなかなか X が出せないのです。

かつて琵琶湖の沿岸にある田んぼは琵琶湖と水路で通じていて、春になってその水位が上がるとフナが田に上がってそこで産卵したようです。日本にも、田で魚をとるというスタイルがあったのです。琵琶湖岸にある守山市の下郷遺跡しもごうでは、集落の周りを取り囲んでいた濠ほりの中から、加工したフナかコイの仲間の魚の頭の部分の骨だけが大量に出土しています。胴体部分の骨は出て来ないので、これは、濠や田に上がってくる魚をとって加工し、頭の部分だけを濠に捨てていたのではないかと考えられています。それでは、そのフ

ナは、いったい何を信号にして川や濠を遡上するのでしょうか。滋賀県立琵琶湖博物館の篠原徹さんによると、田から流れ出る泥水こそがその信号だといいます。田からの泥水は、琵琶湖に限らず環境汚染の元凶のように言われますが、フナにしてみればそれはとんでもない「いいがかり」です。水質の保全、環境の保全とは何か、を考えさせられるエピソードだと思います。

日本でも琵琶湖岸などでは米と魚が同じ田でとれ、なれずしというかたちで食卓の上に載っていたということです。米と魚の究極の姿といえるでしょう。私はこの関係を「米と魚の同所性」と呼んでいるのです。

米と魚のセットは、いったいいつからのものなのでしょうか。この問いに対する考えが、中国の南西部の遺跡から出土した「水田模型」にあります。東海大学の渡部武教授は、中国の四川省はじめ西部にある古い時代の墓から出土した「水田模型」と呼ばれる遺物に注目しています。

水田模型とは、当時の水田の様子をミニチュアのように再現したもので、おそらくは箱庭の感覚で作られたものなのでしょう。大きさや形はまちまちで、直径二〇センチほどの円形のもの、一辺四〇センチほどの方形のものなどがあります。そしてそのいずれにも、田の畔あぜをおもわせる高まりや、中にはイネの切り株らしいものが描かれています。渡部教授によると、その多くに当時田にいたと思われる生き物が描き出されているということです。ある場合は、魚や鳥が水田の表面に描かれています。亀や魚がそれぞれミニチュアのように粘土で作られ、田の表面におかれたものもあります。死者がああ世でも食べ物に困らないようにという配慮からでしょうか。

これらのお墓の年代は、古いものでは二〇〇年ほど前のものといわれます。おそらくその時代から田には魚や亀、昆虫などの動物がいて、人間たちは米とともにそれらを食用にしていたのでしょうか。

考えようによれば、畔のある田があり水が十分あれば、こうしたいろいろな動物が生息するのはむしろ自然なことです。では、田はいつからあったのでしょうか。これも難しい問いではありますが、今わかっている範囲で言うと、すでに六〇〇年前には中国の長江下流域には水田らしいものがあったことがわかっています。場所は、中国江蘇省の蘇州という町の東にある陽澄湖という湖のほとりです。ここにある草鞋山遺跡そうあいざんという遺跡から、水田のあとと思われる構造物がみつかっています。それは、地山じやま（そこから下には人間の生活のあとが認められない硬い地層）を掘り込む形で、不整形のくぼみがいくつもみつかっています。それらのくぼみは細い溝で互いに連結しています。さらに、くぼみのひとつは明らかに他より深く、井戸のあとと考えられるのです。そして何より、くぼみに詰まっ

ていた黒い土からは、イネの葉に溜まっていたケイ酸体が高い密度で見つかったのです。

宮崎大学の教授であつた藤原宏志さんは、これがその時代の田ではないかと考えました。私も現場を見せてもらいましたが、それは、田というにはあまりに異質で、私は「イネも生えていたが、ほかの田の水生动植物も一緒に生息していた環境」ではないかと考えています。とにかく、人為的に作られた環境に、イネや他の生きものが一緒に生息していた可能性のあるしかけとして、この構造物は世界最古といえるでしょう。

(佐藤洋一郎『知ろう 食べよう 世界の米』による)

問一——線①「なれずし」の「なれ」とはどのような意味を表していますか。「□□させたすし」にあてはまるように、文章中の漢字を抜き出して答えなさい。

問二——線②「二年はもつ」の「もつ」を、「□□できる」と言い換えたとき、□□にあてはまる言葉を、文章中から二字で抜き出して答えなさい。

問三 空欄 X (三か所ある) にあてはまる体の一部分を表す、漢字一字の言葉を答えなさい。

問四——線③「加工したフナかコイの仲間の魚の頭の骨だけが大量に出土しています。」とありますが、このことからどういうことが考えられますか。文章中の語句を使って、三十字以内で答えなさい。

問五——線④「その信号」とありますが、どこへ行き着くための「信号」ですか。文章中の言葉を抜き出して答えなさい。

問六——線⑤「『米と魚の同所性』」とありますが、具体的にはどういうことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同じ場所であれた米と魚ですしを作るべきだということ。
- イ 米と魚を発酵させて食べるという、究極の食の姿のこと。
- ウ 同じ田であれた米と魚を、一つの料理にして食べること。
- エ 米と魚の住む環境を守ることが、水質保全につながることに。

問七——線⑥「当時の水田の様子をミニチュアのように再現したもの」とありますが、これについて次の各問いに答えなさい。

(1) 当時の人はどのような目的で、このようなものを墓に作つたと考えられますか。文章中の語句を使って答えなさい。

(2) また、この遺物からどのようなことがわかると筆者は言っていますか。「〜ということ。」と続く形になるように、文章中の言葉を抜き出して答えなさい。

問八——線⑦「水田らしいもの」、⑧「水田のあとと思われる構造物」という表現から、筆者はこの遺跡のことをどのように考えていることがわかりますか。「田ではなく」に続く形で、文章中の語句を使って答えなさい。

問九 この文章を前半と後半に分けた場合、後半はどこから始まりますか。後半が始まる段落の、初めの四字を抜き出して答えなさい。

得点